

〔総論〕

『浄土真宗総合研究』第一九号のテーマと各論文

梯 信 暁

『浄土真宗総合研究』第一九号の統一テーマは、「平和と宗教」である。令和七年度は、戦後八〇年という節目の年であり、各分野において平和に関する研究がなされ、その成果が挙げられつつある。本研究所でも様々な形で平和研究に取り組んできた。

令和六年度には、「平和に関する論点整理（戦後八〇年版）」の作成を目指して、研究所内で数回にわたって検討会議を実施し、戦後五〇年の「戦後問題検討委員会答申」、戦後七〇年の「平和に関する論点整理」「平和に関する論点整理をテーマとした公聴会の意見集約」や、それ以降の取り組みを点検し、また現在世界で起きている武力紛争の現況や専門家の見解などの情報収集に当たった。

令和六年七月三十一日には、「平和のために何をすべきか／何ができるか―戦後八〇年を迎えるにあたって―」をテーマとして第十三回宗門教学会議を開催した。発題者は仏教大学教授大谷栄一氏、曹洞宗総合研究センター研究員宮地清彦氏、本願寺史料研究所所長赤松徹真氏で、その内容は『宗報』令和六年十月号、十一・十二月合併号に報告された。

それらの成果を結集して、「平和に関する論点整理（戦後八〇年版）」を作成し、『宗報』令和七年三月号に発表

した。

さらに三月十三日、「宗教と戦争―信仰と平和の間で―」というテーマで第十二回六条円卓会議が開催された。発題者は桃山学院大学教授石川明人氏で、その内容は『宗報』令和七年七月号、八月号に報告された。

令和七年度に入り、四月十四日に「平和フォーラム」を開催し、総長が「戦後八〇年にあたっての平和を願うメッセージ」を読み上げた。その内容は『宗報』令和七年五月号に掲載されている。続いて相愛学園学园长釈徹宗氏、本願寺史料研究所所長赤松徹眞氏、総合研究所副所長寺本知正氏による鼎談が行われ、加えて宗派製作の映画「ドキュメンタリー沖繩戦―知られざる悲しみの記憶」が上映された。鼎談の内容は『宗報』令和七年八月号、九月号に報告された。

七月三日～五日には、沖繩、長崎、広島において、ご門主様ご出向のもと戦没者追悼法要が勤修された。その模様は『本願寺新報』七月二〇日号に掲載されている。

八月五日、「平和学、平和の教化学の確立に向けて―「非暴力」を視座として―」というテーマのもと第十四回宗門教学会議が開催された。発題者は、広島市立大学広島平和研究所教授佐藤史郎氏、京都女子大学教授市川ひろみ氏、対論者は本願寺史料研究所所長赤松徹眞氏、総合研究所副所長寺本知正氏であった。その内容は『宗報』令和七年十一月・十二月号に掲載されている。

また今年度内には、現代の世界情勢を踏まえた六条円卓会議が開催される予定である。

加えて本研究所では平和研究の一環として、自死や貧困などの問題に取り組んでおり、本号にはそれらの諸問題に関する論文も寄せられている。

本号には、特別に佐々木義英所長の論考「証言 戦後八十年を前にして―シアトル・ベインブリッジ島とミネソ

「タ・キャンパスページの悲劇」が寄せられ、テーマ研究、そして個人研究の進展を報告する論文が掲載されている。

テーマ研究は、次の三点である。

安部智海氏の論文「対人支援の現場から——中動態を手がかりに——」は、対人支援、特に自死に関する支援を論じたものである。東日本大震災や認定NPO京都自死・自殺相談センターでの支援を手がかりとして議論されている。従来、支援関係は「支援する側」と「支援される側」という能動・受動の関係で語られることが多かった。しかし今回の調査対象においては、支援者と被支援者という一方的・分段的な関係ではなく、むしろその分断を乗り越えようとするところに支援活動が成立しているという。安部氏はその関係を、言語学の領域で提唱されている「中動態」という概念によって捉えようとする。支援者と被支援者の関係を、硬直したのではなく、共生を目指すものと考えるのである。それによって、支援・被支援という関係が、「その場をもとにするわたしたち」という関係に変化し、支援を「行為」ではなく「出来事」として再定義することができると述べている。

結論として氏は、Soteloの模擬相談および仮設住宅居室訪問活動の事例において見られた「孤独が和らぐ瞬間」は、相談員の一方的な行為によって生じるのではなく、両者が相談という過程の内部にも巻き込まれ、相互に変化する出来事であり、相談員と相談者がともに生成変化することであるという。氏はそれを「心の居場所」と呼び、それは「わたし」でも「あなた」でもなく、「わたしたち」という関係の「場」であると述べている。

本論文は、教学と現場との乖離や硬直化について考える際の手がかりを提供する業績であるといえる。

富島信海・遠山信証両氏の共著論文「仏教および真宗の人間像・人間観に関する基礎的研究」は、「人間像」「人

間観」をテーマとする仏教学・真宗学の立場からの研究の現状を紹介したものである。浄土真宗本願寺派が公表した「平和に関する論点整理（戦後八〇年版）」に示された、七つの平和貢献策のうち、第四の「人間像の点検（互いのへいのち）を尊重し、支え合う」では、「仏教や真宗の教えに基づいて人間とは何かを理解し、ともに（へいのち）を尊重できる社会の実現」を目標として掲げ、その具体策として、真宗の世界観や人間観に関する研究、ジエンダー問題など現代的課題に即した研究および実践が挙げられている。

今般の富島・遠山論文は、仏教学・真宗学の人間像・人間観に関する資料や論考の収集・整理が試みられており、各領域における研究状況の紹介と分析がなされている。

仏教および真宗の「人間像」に関する研究については、主に、近代以降に形成されてきた人間の規範（モデル）や教化団体の動向に関する研究に焦点を当て、仏教・真宗関係の「婦人」（女性）・「青年」・「少年少女」に関する研究の進展によって、従来、十分に顧みられることの少なかった教化団体の位置づけや、制度・教育・教化実践の実態が、具体的に明らかにされつつあることが論じられている。また、小結では、こうした研究成果を十分に援用していくことで、「戦後問題」検討委員会答申」が「教団の今日的課題」の一つとして掲げた、仏教婦人会・仏教青年会などの活動内容の実態把握や、そこで形成された「国体」の護持・奉公を尊ぶ「画一的な人間像」が、敗戦後においても継承されているのか否かの検証、さらには、現代の平和と人権に関わる多様な女性・青年・少年少女の課題について関係機関が協議を深めていくための基盤を整えていくことも可能となってくるのではないかと論じられている。

仏教および真宗の「人間観」に関する研究については、主に、教理・思想としての人間理解に関する研究に焦点を当て、仏教および真宗の人間観に関する研究が、戦後継続的に蓄積されてきたこと、二〇〇〇年以降は「仏教的人間学」という研究領域が成立したことが指摘され、本論文が、その領域の研究史を俯瞰した業績として位置づけ

られることが主張されている。また、小結では、縁起の自覚にもとづく責任・感謝・内省を軸に人間の生き方を捉え直す視点や、「人間中心主義」を前提とする発想そのものを問い直す視点、あるいは「いのち」の尊厳という立場から人間の在り方を考え直す視点などが見いだされたと述べている。

今般の研究成果を踏まえ、互いの「いのち」を尊重することのできる社会の実現に向け、仏教学・真宗学の立場から様々な提言がなされることが期待できる。

続いて富島信海氏の単著論文「安穩」に関する基礎的研究」は、「安穩」という言葉の歴史的背景や宗教的意義を考察するための基礎資料を提示したものである。『親鸞聖人御消息』の「世の中安穩なれ、仏法ひろまれ」という文言は、浄土真宗において「平和」を語る際に重視されてきたが、その使用の背景や、親鸞と同時代の用例に関する研究を浄土真宗の聖典や関連史資料を対象に網羅的に把握しようとする研究はなされてこなかった。そこで氏は、古代・中世における「安穩」「安隱」という用語に関する先行研究をまとめ、『平安遺文』『鎌倉遺文』『浄土真宗聖典』における用例を検索し、さらに『無量寿経』『教行信証』等の講録における解釈を網羅的に収集している。その結果、「安穩」が、『法華経』『無量寿経』をはじめ、諸経にあらわれる語であること、日本古代の文献において、「安隱」から「安穩」へと表記が移行したこと、日本中世においては、人びとの願いをあらわす語として用いられたこと、浄土真宗の聖教では、『無量寿経』および異訳經典、七僧聖教、親鸞・存覚の著作、蓮如の言行録、法然関連資料などに用例があること、「安穩」には〈仏国土〉〈衆生の身心〉をあらわす意があること、『教行信証』引用文中の「安穩」は、涅槃の四徳（浄楽我浄）のうち常德として理解され、また「安樂をもたらず」という意味での用例もあることが判明した。

本論文によって、現代における「平和」を仏教思想から考える上での一視座が得られたといえよう。

個人研究として、井上慶淳氏の論文「日本仏教思想史における法然浄土教の位置づけについて―称名寺聖教『浄土宗法語』（仮題）を通して〈付・翻刻〉―」が寄せられた。法然浄土教の成立過程を解明するための資料を提示し検討したものであり、新出資料として用いられた称名寺聖教『浄土宗法語』については、その全文翻刻が添えられている。

『浄土宗法語』は、その内容から、法然門流の何者かによつて書かれたことが明らかかな勸化本（談義本）である。本文の大半は、平康頼『宝物集』をもとに作成されていることがすでに指摘されている。それに加えて井上氏は、『宝物集』が治承年間（一一七七―一一八一年）の成立であり、基本的に法然浄土教の影響を受けていないという点に着目し、『浄土宗法語』の大半が、法然以前の資料をもとにしていることを指摘している。法然浄土教の影響を受けていない『宝物集』を、法然門下の著者がどのように評価し利用しているのかを検討することは、法然浄土教の日本仏教史上の位置を解明する手がかりとなると述べている。

本論文の結論として井上氏は、法然浄土教がそれまでの浄土教思想との連続性のなかで成立してきたことを示唆しているという。また『浄土宗法語』が多く庶民を想定して著されていることは、法然浄土教の展開・受容の過程を知る上で重要であると主張し、本書の研究によつて、「法然浄土教の革新性はどこにあるのか」という、古来検討されてきた課題を解明する糸口が得られると述べている。

『浄土宗法語』は、法然浄土教の成立をうかがう資料として大きな価値をもつ文献であり、本論文に提示された井上氏の見解ならびに末尾に付された克明な翻刻は極めて有用である。今後研究の進展が期待されるのである。